

月高だより

北海道札幌月寒高等学校
第 54号
令和8年4月23日発行
発行者 校長 黒島 敏

通勤途中に見る桜の花が色づき、黄砂も舞う季節になりました。年々春が早まってくることを感じる今日この頃、連休を迎える前に最近の出来事などをお知らせいたします。

■外（そと）部活動 部室設置委員会がひらかれました

22日（水）、同窓会とPTAの方が来校され、校長室にて行われました。経緯は令和6年の秋に老朽化の激しい外部活動部室の改修検討委員会が発足、視察の結果あまりにひどい部室の状況に、「改修よりも新たな建物を用意した方が良い」ということで、外で活動する部活にコンテナやユニットハウスを用意することになったというものです。10棟の予定ですが現在までに5棟が設置され、今年も新たに設置が見込まれているところです。

700万円の目標額に対し、同窓会支援金と道立学校ふるさと応援事業への寄付をあわせてたくさんの支援を頂いていますが、目標までは200万円足りないといったところ。今後どのように支援を募っていくかが話し合われました。

私が感じたことは、とにかく同窓会の方々の「月高愛」が強いことと、PTAの「生徒のために支援したい」という強い思いです。話し合いの中では「目標達成のために具体的にどう動くか」が熱く話し合われました。今後、私も積極的に地域に今までの支援のお礼と更なるお願いのためあいさつに回りたいと考えていますが、このたよりをご覧のみなさまにも是非ご協力をお願いしたいところです（支援方法については本校同窓会のホームページをご覧ください）

ところで、月高に赴任が決まった後、他校の校長先生から「月高の同窓会を視察させてほしい」という話をいただきました。よく事情がわかっていない私はその時「ハア」と気のない返事をしましたが、改めて納得したところです。

■夜の学校で・・・

17日（金）、定時制で生徒総会と役員認証式がありました。定時制各学年4人のHR役員が選出され、認証状を手渡しました。聞くと、自薦1名他薦3名とのことで、リーダーとして頑張れと激励しました。

その前に、日頃なかなか見られない定時制の授業の様子を見学させてもらっていたのですが、全日制の2年生の教室で4名の全日の先生方が、作業をされていました。2学年でオンラインによる授業を受ける生徒のために、スーツをほごりだらけにしながら、手作りで天井にカメラを設置されていたのです。本校のような進学校の先生方は「勉強しろ勉強しろ」とうるさいイメージがありますが（私の個人的な感想です）オンラインでしか授業を受けざるを得ない生徒のためを思って夜遅く作業されてる姿に頭が下がりました。私が気づいていないだけでこのように生徒のために様々な工夫をされている先生方は月高にたくさんいらっしゃるかと思います。改めて感謝いたします。

■マンドリン部がラジオ出演します！

4月21日に取材があり、4月24日（金）21:20～と5月1日（金）21:20～と2回にわたり FM 北海道 80.4 で放送されます。「学校訪問イマリエール！」という番組です。是非聞いてみてください。（ラジオで後から聞くこともできます。）

■カラスの巣を駆除してもらいました

4月の下旬からグラウンド横の桜の木があるあたりでカラスがうるさいのが気になっていた方も多いかと思います。カラスは子育ての時期になると、攻撃性が高まるため、外の部活動に影響が出る前に事務長にお願いして巣を駆除してもらいました。「子を思う気持ちはカラスも同じか・・・」と思うと気の毒な気もしますが、野生動物と「共存」が難しいのは熊の例と同様で、人間のテリトリーに入ってきた動物は駆除するしかないのが現状です。事務長によると、駆除の様子を野次馬的に見ているだけで背格好を記憶してカラスが仕返ししてくるそうなので、駆除の場面を見かけたら、あまり見学しないようにしましょう。（他校での例ですが実際に駆除の様子を野球部の子が見学していて、それから野球部のユニフォームを見るとカラスが攻撃するようになった、といったことがありました。）

■あとがき

日に日に世界が悪くなる・・・先日終了したNHKの朝ドラ『ばけぼけ』の主題歌です。中東情勢の悪化で原油価格が上昇し、それに付随する物価上昇が懸念される中、「気のせいさ」とも言てられなくなりました。

私が教諭時代に使用していた資料集にこんな文章が載っていました。映画チャップリンの「独裁者」を解説するコラム横に載っていた文章です。

現実の歴史というものは「少しずつ悪化していく」もので、いきなり最悪の事態になるわけではない。日々の小さな悪化に対して人間は自覚的な抵抗などできないし、ましてや体制を支持していればナチスの時代であっても「自由」や「豊かさ」を満喫できたのだから問題意識を持つこともなかった。・・・そう元ナチス党員は語っている。

数年前、朝日新聞に載っていた記事をもとにした話も紹介します。

ナチスドイツが作ったアウシュビッツ強制収容所。その生還者である93歳の老人の演説である。彼は「若者が自分の苦労話をつまらなと思うのは理解できる」とした上で、「私たちが1930年代のベルリンにいたら想像してみよう。」と話し出す。ある日、「このベンチにユダヤ人は座るな」と言われる。「このプールに入るな」「この音楽隊には入るな」「ユダヤ人には17時以降しかパンを売らない」。差別は徐々にエスカレートする。だが、疎外されることに当のユダヤ人も、周りの人も少しずつ慣れてしまう。気が付くと隔離され収容所ができていた。「アウシュビッツは急に空から降ってきたものではない。権力を握る政府の

行動に無関心になってはいけない」。「そうしなければ空から降ってくる。」と締めくくる。

「ゆでガエル理論」という話があります。カエルを常温の水に入れて徐々に熱すると、その温度変化に慣れ、生命の危機と気づかないうちにゆであがって死んでしまうというものです。いかにもありそうに思えますが、実際は、都市伝説のようなもので科学的に誤っているそうです。しかし、「緩慢な変化を危機と感じないうちに、気が付けば相当なダメージを受けている」ことは誰にでも思い当たるせいか、広く受け入れられています。今の日本も、補助金で、見せかけ上安くなっているガソリン価格に満足し、解消の見込みのない原油不足から目をそらしているように見えるし、公立高校の生徒募集の問題や教員不足の問題を「私立高校の無償化」だとか「ブラックな労働条件」などを原因であるとして短絡的に捉え、実はその背景にある「少子高齢化」や「労働人口の減少」といった問題の本質から、その進行がゆっくりであるが故に目を背けているように見えます。

この話には結論はありませんが、「自分の見たくないものは見ない」自分が信じていることを裏付ける情報だけを探し、自らに不都合な情報を無視する傾向のことを表す心理学の用語を確証バイアスといいます。その結果として、より一層自らの偏った考えを強化してしまいます。現実をしっかりと見定める努力は続けたいですね。